R2 地域協働研究（ステージⅠ）

R02-Ⅰ-07「産・学・地域連携による「注文をまちがえるカフェ（仮称）」運営方策検討調査」

課題提案者　株式会社テムテック研究所　　滝沢市認知症の人と家族の会
研究代表者　社会福祉学部　柏葉英美
研究チーム員　菅野道生（社会福祉学部）　成田英樹（株式会社テムテック研究所）
櫻野正之（滝沢市認知症の人と家族の会・時計屋カフェ）和田與四郎（時計屋カフェ）
小川晃子（岩手県立大学・滝沢市認知症の人と家族の会・時計屋カフェ）

＜要旨＞

本研究では、認知症になっても自分らしく生活できる環境づくりの取り組みとして、全国的に増えてきた「注文をまちがえる料理店」の開催を検討し、既存のカフェ店舗において、「注文をまちがえるカフェ（仮称）」を定期的に開催することをめざし、その運営方法について関係者の合意形成をすることを目的とし取り組んだ。その結果、認知症のある人が活動できる「パンテックおれんじカフェ」の開催を計画することができた。

Ⅰ．研究の概要

新オレンジプランを発展させた「認知症施策推進大綱」では、認知症との「共生」と「予防」を2本柱に、普及啓発・本人発信支援や、認知症バリアフリーの推進、若年性認知症の人への支援や社会参加支援など、認知症になっても自分らしく暮らせる社会をめざしている。認知症の人を単に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人に寄り添いながら、認知症の人が認知症とともに良く生きていくことができるよう、環境整備を行っていくことが重要となっている。滝沢市認知症の人と家族の会では、認知症になっても自分らしく生活できる環境づくりに取り組み、全国的に増えてきた「注文をまちがえる料理店」の開催を検討してきた。先進事例の多くは、単発での開催であり、定期的で持続可能なものが少ない現状がある。そこで、岩手県立大学地域連携棟に隣接する㈱テムテックのパン販売とカフェを運営する店舗（以下、パンテック）において、「注文をまちがえるカフェ（仮称）」を定期的に開催することをめざし、その運営方法について検討し、関係者の合意形成をすることを目的に取り組んだ。

Ⅱ．研究の内容

1．講演会の開催

令和2年7月8日(水)岩手県立大学講堂において、若年性アルツハイマー型認知症の当事者である丹野智文氏を講師に「認知症の本人と進めるまちづくり」をテーマに講演会を開催した。また、滝沢市で開催している認知症カフェ「時計屋カフェ」の2年の歩みを紹介し、認知症当事者や家族が暮らしやすい社会について考えた。パネルディスカッションにおいては、「注文を間違えるカフェ(仮称)実現に向けて」をテーマに、認知症当事者、認知症の家族、認知症支援者、パンテックの社長など5名が参加し、認知症当事者の社会参加実現に向けての意見交換が行われた。講演会への参加者は126名で、認知症当事者とその家族、専門職や地域住民、学生などが参加した。また、講演会終了後に、丹野氏を囲んで参加者との交流会を持ち、認知症バリアフリー実現に向けて、活発な意見交換がなされた。

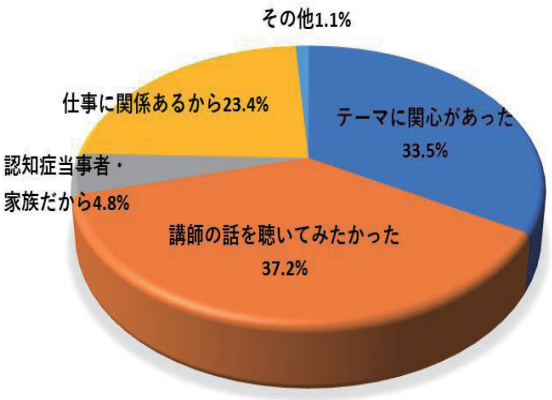

図１　講演会に参加した理由（n=101）

表１　自由記述一部抜粋

- 認知症になってもできることがある。認知症になっても、あきらめない。そのために自分がどう生きていくか、何をするか考え行動することを、支援していくことが大事であると思った。本人の体験を聴き、これからの活動の意識改革になった。
- 目線を変えてみてみると違った風景になる。このイベントがカフェのきっかけになるとするなら広く伝わったと思います。
- 認知症になったからと言って行動を狭めるのではなく、つながる場を作っていくことに感銘をうけました。
- 「守る、責任を取る」が一番ではなかった。偏見だった。リスクだけではなく、「どんな気持ちになるか」聞きながら考えていきたい。一緒にやっていきたい。
- 当事者の方のお話をはじめて聞かせていただき、何を求めているのか、考えているのかを知ることができました。福祉に関心のない方にも話を聞いてもらえるようにすることで、「他人事ではなく自分事」となるのかなと感じました。

図２　講演会チラシ

２．先進事例の調査

岩手県においては2019年10月に北上市で「注文のやんべな料理店(注文のやんべな料理店プロジェクト)」が開催され、同年12月に盛岡市では「注文をまちがえるカフェ」(飯岡・永井地域包括支援センター）が開催された。そこで、先進事例調査として、注文のやんべな料理店プロジェクト実行委員長および副委員長を講師にオンライン研修会を開催し、具体的な進め方についてアドバイスを受けた。

３．「注文をまちがえるカフェ(仮称)」の開催に向けての検討

研究者および共同研究者、研究協力者が集まり、検討会の開催を繰り返し、具体的な実施案を作成した。検討した結果、店舗が休みである月曜日に、パンテックの店舗を認知症の人のために貸してもらえることとなり12月14日(月)にプレオープンが決定した。

Ⅲ．具体的な運営について

１．カフェのネーミングについて

カフェのネーミングについて、７月に実施した講演会において、講師である丹野氏から「『注文をまちがえるカフェ（仮称）』では、『認知症の人＝まちがえる人』になってしまい、間違えることが前提となってしまう。むしろ、認知症の人が間違わないシステムを考えるべきである」とのアドバイスから、「注文をまちがえるカフェ（仮称）」から「パンテックおれんじカフェ」に決定した。ネーミングの理由としては、店舗を貸してくれるお店の名前を入れることで、来店してくれるお客様にとって、場所が分かりやすいというメリットがあるのと同時に、「おれんじカフェ」とすることで、認知症カフェとしての運営もできると考えた。

２．注文をまちがわないシステムについて

パンテックのお店のランチメニューの中から、２つのメニューに限定した。注文の仕方は、①レジでランチメニューと飲み物を注文し、会計を済ませたお客さんにナンバープレイトが渡され、席へ案内し、食事を運ぶというシステムにした。

３．開催方法について

予約制として1部20名(11時30分～)、2部20名(13時00～)とし、お店に出る認知症当事者も２部制で入れ替えることとした。準備のポイントとして、サポーターとして協力しくれるボランティアとペアで行動することや、食事をスムーズに運べるよう、店舗内のテーブルの配置を確認し、テーブルとテーブルの間隔を広くとることや、動線の確認、食事を運ぶためのワゴンの選定（軽くて、安定性のあるもの）など、当事者の立場で考え準備を行った。また、継続的に実施するためにも、認知症当事者の労働に対する対価についても検討した。プレオープンでは、認知症当事者への謝金は無い状況であったが、お店のコーヒーチケットを出してもらうこととし、開催状況をみて、売り上げから謝金を支払う方向で検討していくことにした。

図３　チラシ(上)とメニュー(左下)、店内案内(右下)

４．定期的・継続的に開催した場合に期待される効果について

開催に向けて準備を進める過程において、COVID-19の感染症拡大により開催を中止しなければならなかった。そのため、「パンテックおれんじカフェ」でのアクションリサーチができなかった。しかし、この取り組みを進めることで期待される効果として以下のことが考えられた。

①認知症当事者や家族にとって、「できることがある」ことが生きがいや喜びにつながる。

②学生や地域のボランティア(サポーター)や地域住民にとっては認知症等のバリアフリー社会の実現や方策について学ぶ場となる。

③この取り組みが、認知症等のバリアフリー社会づくりの先進モデルとして評価され、バリアフリー社会づくりへの波及効果となる。

今後、ワクチン接種が進み、感染症の終息が確認できれば、開催可能な状況である。